

タガログ語の措定文と指定文

長屋 尚典

はじめに

1. タガログ語の非動詞述語文
2. 措定文と指定文の使い分け
3. 分類のあいまいさと例外

おわりに

はじめに

タガログ語の非動詞述語文の構造はきわめて単純であり、主語と補語を並置 (juxtapose) することによって成立する。日本語と異なり、この言語は一貫した主要部先行型の言語であるため、非動詞述語文の主語は補語に後行し、(1) のように「補語 + 主語」という構造をなす (本論においては、Curnow (2000) ならびに Dixon (2002) にしたがって、非動詞述語文については「述語」でなく「補語」という用語を用いる。あとで詳述するが、「補語」には叙述的要素以外のものも現れるからである)。

(1) 補語 + 主語

(1) のような構造を持つタガログ語の非動詞述語文には、大きく分けて、措定文と指定文という二つの構文が存在する。措定文とはある特定の個体についてある属性を叙述するタイプの構文であり、指定文は既に前提となっている属性や性質について、そのような叙述にあてはまる個体はこれであると排他的に指定するタイプの構文である。この二つの構文は、真理条件的に言えばほぼ同じ内容の事象を表現できるが、その語用論的な表現効果において大きく異なる。具体例を見てみよう。(2) が措定文の例、(3) が指定文の例である。

(2) Bida sa pelikula si Piolo.
 lead LOC movie P.NOM Piolo
 「ピオロは映画の主役だ。」

(3) Si Piolo ang bida sa pelikula.

P.NOM Piolo NOM lead LOC movie

「ピオロが映画の主演だ。」

「映画の主演はピオロだ。」

例文 (2) (3) はどちらも真理条件的には「ピオロ」という人物が「映画の主演」になっているという意味を持っている。しかし、両者は語用論的表現効果において異なっている。措定文 (2) は、「ピオロ」という特定の個体が「映画の主演」という属性を持っているということを単純に述べているのみである。一方で、指定文 (3) はすでに「映画の主演」が話題としてとりあげられ前提となっているような状況で、その叙述に見合う個体を「ピオロ」であると排他的に指定している。(2) と (3) が記述している事実は同じものといえるかもしれないが、それをどう伝達するかという点で両者は大きく異なるのである。

例文の日本語訳からも分かるように、この二つの構文の違いは、日本語でいえば、「AはBだ」構文と「AがBだ」構文（および、その倒置文としての「BはAだ」構文）の違いに対応している（西山 2003）。たとえば、例文 (4) と (5) の違いを観察してみよう。

(4) 太郎はその事件の犯人だ。 [措定文]

(5) a. その事件の犯人は太郎だ。 [(倒置) 指定文]

b. 太郎がその事件の犯人だ。 [指定文]

(4) は「太郎」という個体について「その事件の犯人」という属性を付与しているが、一方で、(5) はすでに話題となっている「その事件の犯人」として「太郎」という個体を排他的に指定している。この説明から明らかなように、日本語の措定文と指定文でなされる区別をタガログ語の (2) と (3) は表現している。言い換えると、日本語で語順および「は」「が」の違いとして具現するような表現効果を、タガログ語では異なる構文で表し分けているのである。

本稿の目的は、タガログ語のこの二つの構文、すなわち、措定文と指定文の特徴ならびに相違点を明らかにすることである。タガログ語の研究、あるいは広くフィリピン諸語の研究において、早くからこの二つのタイプの構文は区別されていた (Schachter and Otones 1972)。しかし、動詞述語文の研究に注目が集まる一方で、Nagaya (2011) が名詞句の指示性の文脈でこの二種類の非動詞述語文の違いを問題にするまで、この非動詞述語文の二つのタイプは真剣にとりあげられることはなかった。本論文は、Nagaya (2011) を継承しつつ、その後得られたデータや知見、批判も考慮に入れながら、タガログ語における措定文と指定文の違いや、両者の間

であいまいになる例について分析する。

本論文の構成は以下の通りである。第 1 節では、タガログ語に関する背景知識を導入したのちに、措定文と指定文、それぞれの下位範疇と関連構文について記述する。第 2 節では、その違いについてさまざまな観点から対照する。第 3 節では、本論文で提示する分類においてあいまいになってしまう例を検討する。さらに、以上の分析をへたうえで、どうしても例外となってしまう *Ako si Maria* 「私は Maria です」というパターンについて議論する。最後に、結論をまとめて、この論文を結ぶ。

なお、具体的論考に進む前に一つ申し添えておかなければならないことがある。先に述べたように指定文の日本語訳としては左から右に訳すやり方 (3) でいえば「Piolo が映画の主役だ」と右から左に訳す方法 (同様に「映画の主役は Piolo だ」) の二種類がある。以下では、VSO 言語であるタガログ語の構造をより忠実に反映した「B は A だ」式 (右から左) の訳を指定文の日本語訳にあてることとする。Schachter and Otnes (1972:530) もタガログ語を英語に訳す際にタガログ語の構造をより忠実に反映した訳し方をしている。もちろん「A が B だ」と左から右に訳してもかまわないし、そう訳したとしても本論文の趣旨に影響がでることはない。

1. タガログ語の非動詞述語文

本節では措定文と指定文についてその下位範疇を概観する。その前提として、まず 1.1 節でタガログ語に関する基本的な情報をまとめる。次に、1.2 節と 1.3 節でそれぞれ措定文と指定文について記述し、1.4 節では同定文を導入する。同定文は措定文や指定文とは異なるタイプの非動詞述語文であり、それが利用される文脈は限られているので、ここに別に論じる。1.5 節でこの節をまとめる。

1.1. タガログ語について

タガログ語はオーストロネシア語族西マラヨ・ポリネシア語派に属する言語である。この語派に属する言語としてはセブアノ語、イロカノ語をはじめとするフィリピンの諸言語やインドネシア語、マレーシア語などの西インドネシア、マレーシアの諸言語がある。タガログ語はフィリピン共和国マニラ首都圏およびその周辺地域の土着の言語であり、2000 万を超える人々によって母語として話されている。一方で、フィリピン共和国の公用語であるフィリピノ語が実質的にタガログ語であるために、フィリピノ語としてはフィリピン全土で話されている。

この言語は 3 つの異なる名前を持っている。まず、「タガログ語」であるが、これはマニラ首都圏およびその周辺地域で話される土着の言語 (およびそれを話す人々) の名前である。一方で、この言語はフィリピン共和国の公用語としては「フィリピノ語」と呼ばれている。理念

的には「タガログ語」と「フィリピン語」は異なるが、言語実質としてはほぼ同じものと考えてよい。さらに、この言語は東京外国語大学の制度上は「フィリピン語」とも呼ばれる。「タガログ語」、「フィリピン語」、「フィリピン語」というそれぞれの訳語にはそれぞれのニュアンスがあるが、言語的実質としては「タガログ語」という一つの言語であり、言語学の論文である本稿では「タガログ語」という名称で一貫してこの言語を呼ぶことにする。

言語類型論的に見た場合、タガログ語は主要部先行型の言語であり、基本語順は VSO である。名詞は叙述名詞である場合 (1.2 節を参照) やリンカーを介して名詞修飾表現として機能している場合を除き、主格、属格、場所格、いずれかの格標識で標示される。これらの格標識は名詞に先行する。以上の記述は以下の例文 (6) で確認できる。

- (6) K<um>ain ang bata ng halo-halo sa kusina.
 AF:eat NOM child GEN halo-halo LOC kitchen
 「子どもがハロハロを台所で食べた。」

例文 (6) で、述語である動詞は文の先頭に出てきている。続いて、名詞句が、行為者、行為の対象、場所の順で、それぞれ *ang*、*ng*、*sa* によって導かれている。*ang*、*ng*、*sa* はそれぞれ主格、属格、場所格を標示し、文法的には後続する名詞句に依存するクリティックであるが、本論文では正書法にならない独立の語として表記している。

この言語は「フォーカス・システム (focus system)」と呼ばれる動詞形態論をもっている。具体的に言えば、主格で標示される主要文法項の意味役割に応じて、異なる動詞接辞が動詞に現れる。例文 (6) においては「食べる」という行為の行為者が主格で現れているために <um> という接中辞が語根 *kain* 「食べる」に付与されている。しかし、例文 (7) のように「食べる」という行為の対象が主格で現れているときには *-in* という接尾辞が語根に付与される。

- (7) Ka-kain-in ng bata ang halo-halo sa kusina.
 PF:PROS:eat GEN child NOM halo-halo LOC kitchen
 「子どもがハロハロを台所で食べるだろう。」

(6) と (7) とを比べてみると、動詞が <um> で標示されている (6) では、行為者である「子ども」が主格の *ang* で標示されている。一方で、「ハロハロ」は属格の *ng* で標示されている。これに対して、動詞が *-in* で標示されている (7) では「ハロハロ」の方が *ang* で標示され、「子ども」は *ng* で標示されている。動詞の接辞が変わることで、その動詞の格フレームも変わってしまった

ているわけだ。本論文で主に扱うのは非動詞述語文であるため、以下ではフォーカス・システムはあまり出てこない。しかし、フォーカス・システムは特筆すべきタガログ語の文法現象である。

1.2. 指定文とその下位範疇

本節から (1) という構造を持つ非動詞述語文の分析に入る。まずは指定文である。指定文 (predicational constructions) とは、ある個体について、その個体のもつ属性を叙述するタイプの非動詞述語文である。定式化するならば (8) のようになる。

(8) 補語	+	主語
裸名詞句など		主格名詞句
属性		< 個体 >

この指定文の典型は、補語の位置に名詞述語が現れる名詞述語構文である。たとえば、以下の (9) と (10) を参照して欲しい。

(9) Magsasaka ang lalaki.
 farmer NOM man
 「(その) 男は農民だ。」

(10) Pangulo ng kumpanya ang babae=ng iyon.
 president GEN company NOM woman=LK DEM.DIS.NOM
 「その女性は会社の社長だ。」

指定文 (9) は、主語の主格名詞句 *ang lalaki* 「(その) 男」の指示する個体が補語の裸名詞 *magsasaka* 「農民」の表現する属性を備えていることを表現している。同様に、(10) では主語の主格名詞句の指示対象である個体が、補語の裸名詞句の記述する属性の持ち主であると述べているのである。なお、(10) では遠称指示代名詞の主格形 *iyon* がリンカーを介して名詞 *babae* を修飾している。以下にも同様のパターンが出現するが、この指示代名詞の主格形は名詞を修飾するためにこの形式をとっているものであり、主語を標示する主格形とは別のものであることに留意してほしい。

ここで (8) で用いた「主格」という用語についてももう少し説明する必要がある。この論文で主格と呼ぶものには、これまでの例のように主格名詞標識 *ang* で標示されているものだけでなく、個人名が主格であることを標示する *si* や、会話などのインフォーマルなスタイルで *ang* の代わりにする *yung* (ただし、Nagaya 2011 を参照) で標示された名詞句も含まれる。さらには主格に屈折した代名詞も含まれる。以下の例を見てみよう。

(11) Henyo si Mozart.

genius PNOM Mozart

「モーツァルトは天才だ。」

(12) Filipina yung babae.

Filipina NOM.DIS woman

「その女性はフィリピン人だ。」

(13) Taga-Iloilo siya.

from-Iloilo 3SG.NOM

「彼(女)はイロイロの出身だ。」

(14) Halo-halo ito.

halo-halo DEM.PROX.NOM

「これはハロハロ(フィリピンのかき氷)だ。」

(11) では固有名詞 *Mozart* を導くために *si* で主格形が標示され、(12) では *ang* の代わりに *yung* で主格が標示されている。さらに、(13) と (14) では、それぞれ人称代名詞と指示代名詞の主格形が用いられている。このように主格形の表現にはさまざまな種類がある。もちろん数ある主格の表現方法のうちどれを使うかということで非動詞述語文の分類が変わるということはない。

措定文の構文パターン (8) では主語の意味として「個体」という用語を用いているが、この主語に現れる名詞句が総称指示をもつ、すなわち「種」を指示することもある。たとえば、(15) で主語名詞句は「ティラピヤ(フィリピンで日常的に食べられる魚)」という種を指示している。

(15) Isa=ng uri ng isda=ng nakakain ang tilapya.

one=LK kind GEN fish=LK edible NOM tilapya

「ティラピヤは食用魚の一種である。」

さらに、(8) では補語の位置に裸名詞句、すなわち、*ang* などの格標識を持たない名詞句が出現するとしている。しかし、典型的にはそうであるが、裸名詞句以外が補語の位置に現れることもある。具体的には、形容詞、場所述語、前置詞句などの非動詞述語がこの位置に出現することができる。たとえば、(16) では形容詞 *maganda* 「美しい」が、(17) では数詞を主要部とする句 *isa sa mga pinakasikat na blog sa Pinas* 「フィリピンでもっとも有名なブログの一つ」が、(18) では前置詞句 *para sa iyo* 「あなたのため」が、(19) では場所存在表現 *nasa opisina* 「オフィスにいる」が、(20) では所有表現 *may problema* 「問題がある (問題を抱えている)」がそれぞれ補語として出現している。

(16) Ma-ganda si Maria.

ADJ-beautiful P.NOM Maria

「マリアは美しい。」

(17) Isa ito sa mga pinaka-sikat na blog sa Pinas.

one DEM.PROX.NOM LOC PL most-famous LK blog LOC Philippines

「これはフィリピンでもっとも有名なブログの一つだ。」

(18) Para sa iyo ang pera=ng iyon.

for LOC 2SG.LOC NOM money=LK DEM.DIS.NOM

「そのお金はあなたのためのものだ。」

(19) Nasa opisina ang kaibigan ko.

be.at office NOM friend 1SG.GEN

「私の友達はオフィスにいる。」

(20) May problema si Juan.

have problem P.NOM Juan

「Juan は問題を抱えている。」

このようにさまざまな種類の要素が指定文の述語として用いられるが、いずれの文においても主格名詞句がある個体を指定し、それについての属性あるいは性質を補語の位置をしめる述語が表現している。この構文においては、特定の個体を指し示すゆえに、主格名詞句は指示的である。一方で、補語の位置をしめる要素は属性を表現し、特定の指示物があるわけではない。それゆえに非指示的である (Nagaya 2011)。

1.3. 指定文とその下位範疇

指定文 (specificational constructions) とは、すでに話題となっている属性について、その属性をもつのがまさにこの個体であると排他的に指定するタイプの文のことである。構造的に言えば、すでに話題になっている属性を主格で標示された主語が記述し、その属性をもつ個体を同じく主格で標示された補語で表現する。このことは、(21) のようにパターン化できる。

(21) 補語	+	主語
主格名詞句		主格名詞句
< 個体 >		属性

典型的には、指定文は主語も補語も主格名詞句である場合が多い (この例外については3.2節を参照のこと)。以下の指定文 (22) と (23) は、それぞれ措定文 (9) と (10) に対応している。

(22) Ang lakaki ang magsasaka.
 NOM man NOM farmer
 「農民であるのは(その)男だ。」

(23) Ang babae=ng iyon ang pangulo ng kumpanya.
 NOM woman=LK DEM.DIS.NOM NOM president GEN company
 「会社の社長なのはその女性だ。」

(22) では主語の主格名詞句 *ang magsasaka* 「農民(であるの)」が表現する属性の持ち主が、補語の主格名詞句 *ang lakaki* 「(その)男」の指示する個体であると指定している。(23) でも同様に、主語の主格名詞句が叙述する属性を持っているのが補語の主格名詞句の指示対象であると指定しているのである。

指定文を理解するときにもっとも重要な点は、措定文と指定文では個体と属性の出現位置が真逆になっているところである。(8) と (21) を比較すればよくわかるように、措定文では主語に個体が補語に属性が表現される。一方で、指定文では主語に属性が補語に個体が表現される。このことから指定文のことを「反転した措定文」(Moro 1997) と呼ぶ研究も存在するほどである。

したがって、個体を指示する措定文の主語にいろいろな主格形が出現できたように、指定文の補語にもさまざまな主格形が出現する。指定文の例文 (24) (25) (26) (27) は、それぞれ措定文

の例文 (11)(12)(13)(14) に対応し、補語に、それぞれ、*si* で標示された個人名、*yung* で標示された普通名詞、人称代名詞の主格形、指示代名詞の主格形が出現している。

(24) Si Mozart ang henyo.

P.NOM Mozart NOM genius

「天才なのはモーツァルトだ。」

(25) Yung babae ang Filipina.

NOM.DIS woman NOM Filipina

「フィリピン人なのはその女性だ。」

(26) Siya ang taga-Iloilo.

3SG.NOM NOM from-Iloilo

「イロイロの出身なのは彼(女)だ。」

(27) Ito ang halo-halo.

DEM.PROX.NOM NOM halo-halo

「ハロハロ(フィリピンのかき氷)はこれだ。」

属性を表現する主語に現れる要素も同様である。指定文で属性を表す補語が裸名詞句以外の要素であってもよかったように、指定文で属性を表現する主語が名詞句以外の要素になることもある。以下の指定文の例文 (28)(29)(30)(31)(32) は、指定文の例文 (16)(17)(18)(19)(20) に対応し、主語に、それぞれ形容詞、数詞を主要部とする句、前置詞句、場所存在表現、所有表現が現れている。さらに、(33) のように主語が指示代名詞である場合もある。主語に現れるのが名詞句であろうとなかろうと一貫して主格で標示されていることにも留意しながら例文をみていただきたい。

(28) Si Maria ang ma-ganda.

P.NOM Maria NOM ADJ-beautiful

「美しいのは Maria だ。」

(29) Ito ang isa sa mga pinaka-sikat na blog sa Pinas.

DEM.PROX.NOM NOM one LOC PL most-famous LK blog LOC Philippines

「フィリピンでもっとも有名なブログの一つはこれだ。」

- (30) Ang pera=ng iyon ang para sa iyo.
 NOM money=LK DEM.DIS.NOM NOM for LOC 2SG.LOC
 「あなたのためのものはそのお金だ。」
- (31) Ang kaibigan ko ang nasa opisina.
 NOM friend 1SG.GEN NOM be.at office
 「オフィスにいるのは私の友達だ。」
- (32) Si Juan ang may problema.
 PNOM Juan NOM have problem
 「問題を抱えているのは Juan だ。」
- (33) Si Juan iyon.
 PNOM Juan DEM.DIS.NOM
 「それは Juan だ。」 (cf. (32))

1.2 節では措定文において主語が指示的である一方で、属性を記述する補語が非指示的であることをみた。指定文が「反転した措定文」であることの帰結として、指定文において個体を指定する補語は指示的であるが、属性を叙述している主語は非指示的である。この事実の具体的な論証については Nagaya (2011) を参照してほしい。

このように措定文と指定文は個体と属性の位置について対称的であり、まるで鏡像のような関係にあるとさえ言える。しかしながら、そのことは両者の使用頻度や使用の自然さがまったく同じであるということまでは意味しない。実際には、措定文の方が頻度も高いし、適切である場面も多い(第 2.1 節も参照)。措定文とそれに対応する指定文を比べたときに、指定文の方が使用の文脈が制限されており、自然さが落ちる場合もある。たとえば、措定文 (34) と指定文 (35) のペア、そして、措定文 (36) と指定文 (37) のペア、措定文 (38) と指定文 (39) のペアを比べてみてほしい。これらの例において、指定文 (35) (37) (39) の使用コンテキストは限られている。また、それゆえにこの二つの指定文を不自然であると判断した話者もいた。

- (34) Pedro ang pangalan ko.
 Pedro NOM name 1SG.GEN
 「私の名前は Pedro だ。」

- (35) Ang pangalan ko ang Pedro.
 NOM name 1SG.GEN NOM Pedro
 「Pedro なのは私の名前だ (i.e., 姓ではない)。」
- (36) Bukas ang party.
 tomorrow NOM party
 「パーティーは明日だ。」
- (37) Ang party ang bukas.
 NOM party NOM tomorrow
 「明日なのはパーティーだ (i.e., ミーティングではない)。」
- (38) Tatlo kami=ng magkakapatid.
 three 1PL.EXC=LK brothers/sisters
 「私たちは三人兄弟だ。」
 (lit. 「私たち兄弟は三 (人) だ。」)
- (39) Kami=ng magkakapatid ang tatlo.
 1PL.EXC=LK brothers/sisters NOM three
 「三人兄弟なのは私たちだ (i.e., 彼らではない)。」
 (lit. 「三 (人) なのは私たち兄弟だ (i.e., 彼らではない)。」)

タガログ語の指定文には注意すべき関連構文がある。それは、擬似分裂文である。タガログ語において擬似分裂文とは、動詞述語文の述語の項のみに (語用論的な) 焦点をあてるときに使用される文のことである。意味的には動詞述語文に対応するものの、構文としては指定文と同じ構造をとる。具体例を見てみよう。動詞述語文 (40) と擬似分裂文 (41) を比較してほしい。

- (40) D<um>ating dito si Carmen.
 AF:arrive DEM.PROX.LOC P.NOM Carmen
 「カルメンはここに到着した。」
- (41) Si Carmen ang d<um>ating dito.
 P.NOM Carmen NOM AF:arrive DEM.PROX.LOC
 「ここに到着したのはカルメンだ。」
 「カルメンがここに到着した。」

動詞述語文 (40) は *dumating* 「到着する」を述語とし、カルメンという個体が話者の属する領域（「ここ」）に到着したという意味を持っている。この文だけであると、動詞に語用論的な焦点があたっているが、もし個体「カルメン」にだけ焦点をあてようとする、動詞述語文ではいけない。擬似分裂文を使わなければならないのである。そこで擬似分裂文 (41) である。この文は素直に訳せば「ここに到着したのはカルメンだ」という日本語になり、この訳から明かなように意味的には指定文である。すでに話題となっている「ここに到着した」という動作について、それを行ったのがカルメンであると指定しているからである。指定文の訳し方が二つあったように、この擬似分裂文にも訳し方が二つあり、(41) を「カルメンがここに到着した」と訳すことも可能で、そうすると動詞述語文 (40) 「カルメンはここに到着した」との違いが分かりやすい。本稿では動詞述語文は扱わないため、動詞述語文に対応する擬似分裂文はこれ以上扱わない。擬似分裂文の文法的特徴や実際の使用における機能については Nagaya (2007, 2011) を参照されたい。

最後に、指定文についての議論を閉じるまえに、一つ付け加えておきたいことがある。語類の言語類型論においてしばしばタガログ語が「名詞と動詞の区別を欠く言語」の例として言及されることがあるが（たとえば、Schachter 1985, Sasse 1993 など）、その大きな論拠となっているのが、ある語彙素が形態論的操作なしに措定文の補語としても指定文の主語としても使用できるという事実なのである。上記の指定文 (28) (29) (30) (31) (32) および指定文の特殊ケースとしての擬似分裂文 (41) を今一度見ていただきたい。これらの文においては、主格標識の *ang* の直後に名詞以外の要素が出てきており、動詞や形容詞などが *ang* によって導かれることで主語 = 主格名詞句として機能している。この現象をどう分析するかについては少なくとも二つの考え方があり、ひとつはこの構文において動詞や形容詞が名詞化されているという分析である。もうひとつはこれらの構文においては動詞や形容詞が主格名詞句を構成しているという外心的な (exocentric) 構造分析である（たとえば、Van Valin 2008）。どちらの立場が正しいかは本論文で議論できないが、上記のように、ある語彙素が項としても述語としても機能するがゆえに、タガログ語においてしばしば名詞と動詞という語類の区別ができないように見えてしまうことだけは強調しておきたい。

1.4. 同定文

これまでに見てきたように、タガログ語の非動詞述語文は措定文と指定文に分類することができる。しかし、使用例はあまり観察できないものの、どちらにも属さないタイプの非動詞述語文も存在する。それが同定文である。

同定文は、その名の通り、ある特定の個体と別の個体が実は同一なのだと同定する文のこと

- (45) Siya yung babae=ng iyon
 3SG.NOM NOM.DIS woman=LK DEM.DIS.NOM

「その女性は彼女（と実は同一人物）だ。」

- (46) ??Yung babaeng iyon siya.

さらに、人称代名詞を含まない同定文でも、(47)のように、補語が内容的に重く多くの語を含んだような場合であると不自然に聞こえるようだ。

- (47) ??Yung s<um>akay sa taxi yung babae=ng iyon.
 NOM.DIS AF:ride LOC taxi NOM.DIS woman=LK DEM.DIS.NOM

「その女性はタクシーに乗った人（と同一人物）だ。」

このように、同定文は意味も特殊で使用についてさまざまな制限がある。措定文や指定文のように自由に使うことはできない。第3.1節でも触れるように実際の自然談話で使われる頻度も高くない。本稿が、タガログ語の非動詞述語文のなかでも、措定文と指定文に注目するのはこのためである。

1.5. まとめ

本節では、タガログ語の非動詞述語文には大きく分けて措定文と指定文があり、それぞれに下位範疇があることを論じた。また、この二つの大分類の他に、例としては少ないものの、同定文という特殊な文のタイプが立てられることも指摘した。これまでの議論をまとめると表1のようになる。

表 1: タガログ語の非動詞述語文の類型

	補語	主語
措定文	属性 = 裸名詞など	< 個体 > = 主格名詞句
指定文	< 個体 > = 主格名詞句	属性 = 主格名詞句など
同定文	< 個体 > = 主格名詞句	< 個体 > = 主格名詞句

この三種の非動詞述語文は根本的には意味で区別される。すなわち、措定文とはすでに知られた個体についてある属性を述語づけてやる文であり、逆に指定文とはすでに話題となっている属性についてそれをもつ個体を指定してやる文である。同定文は別のものと思われていた二つの個体が実は同じものであると同定するのである。英語のコピュラ文や日本語のコピュラ文

の研究からも明らかなように、この区別自体は世界の言語によく見られる区別である。

タガログ語の場合、この意味的違いが構文的な違いとなって現れる。特に、個体と属性の出現位置である。措定文では主語に個体が出現するが、指定文では補語に出現する。一方で、措定文では補語に属性が出現するが、指定文では主語に出現する。同定文では主語も補語も個体である。すなわち、三種類の文の意味的違いが構造的違いとなって、もっと正確に言えば、語順の違いとなって現れているのである。とりわけ注目すべきは、ある属性を個体に述語づける措定文では属性が文の先頭に来ていて、ある属性を持つ個体を特定する指定文では個体が文の先頭に来ていることである。このことをもう一度例文を使って確認するなら以下のようになる：

(48) 措定文: 補語 = 属性 + 主語 = 個体

Doktora si Olive.

doctor PNOM Olive

「オリーブは医者だ。」

(49) 指定文: 補語 = 個体 + 主語 = 属性

Si Olive ang doktora.

PNOM Olive NOM doctor

「医者なのはオリーブだ。」

「オリーブが医者だ。」

(48) のように措定文では属性が先頭に現れ、(49) のように指定文では個体が文の先頭に現れる。言い換えれば、それぞれの文で発話上もっとも重要なポイントが文の先頭に来ているのである。この意味で、措定文と指定文の語順は “Provide the most important information first” という First Things First Principle (Gundel 1988:229) を具現化したものだと言えよう。(正確に言えば、ここでいう「文の先頭」とは「節の先頭」である。Nagaya (2007) で論じたようにタガログ語は節の先頭に語用論的な焦点が来なくてはならない言語なのである。一方で、文の先頭には話題や前提となる要素が前置されることがある。)

2. 措定文と指定文の使い分け

第1節では措定文と指定文を導入し、これら二つがタガログ語の非動詞述語文の主要な構文であることを論じ、意味的性質や構造的特徴を記述した上で、その下位範疇のいくつかを区別した。繰り返すと、措定文とは主語で表現された個体について補語で記述された属性を述語づけるものであり、指定文とは主語で表された属性について、その持ち主を補語の指示する個体であると排他的に指定するものである。このように、これまでの議論で二つの構文の特徴ははっきりした。しかし、一方で、具体的にこの二つの構文がどのように使い分けられるのかという点については不十分である。そこで、本節では措定文と指定文について、その統語的差異、意味的違いを議論する。

2.1. 発話のポイント

措定文と指定文はまずなによりも発話のポイントが異なる。前者は属性にポイントがあり、後者は個体にポイントがある。措定文 (50) と指定文 (51) を比べてみよう。

(50) Estudyante sa TUFs si Kazuki.

student LOC TUFs P.NOM Kazuki

「一輝は東京外国語大学の学生だ。」

(51) Si Kazuki ang estudyante sa TUFs.

P.NOM Kazuki NOM student LOC TUFs

「東京外国語大学の学生なのは一輝だ。」

措定文 (50) は一輝という特定の人物・個体が学生という属性をもつということを述べている。この措定文を発話する状況においては、すでに一輝という人物は知られており、その一輝についての新しい情報を付加する役目を文頭の補語は担っているのである。言い換えれば、「東京外国語大学の学生である」という属性が発話のポイントなのである。一方で、指定文 (51) は、すでに「東京外国語大学の学生」という属性が話題となっている状況で、その属性をもつのが一輝という個体であると指定しているのである。措定文 (50) の場合と異なり、属性は新しい情報ではなく、その持ち主である個体の指定こそが新しい情報なのである。したがって、発話のポイントは個体の指定にある。

このように発話のポイントが異なるので、措定文と指定文は用いられる文脈・状況が異なっている。措定文は、すでに話題となっている人物や事柄について、述語づけていく構文であり、その意味では語用論的に無標の構文である。一方で、指定文はすでに話題となっている属性に

ついてその持ち主を指定するという少し変わった有標な表現方法である。したがって、用いられる文脈・状況にも限定があり、典型的には、疑問文とその答えや訂正表現などのように個体に焦点をあてて表現する必要があるときに用いられる。

2.2. 否定文での含意

措定文と指定文は発話のポイントが異なるため、否定文で用いられたときの含意が異なる。措定文 (50) と指定文 (51) を否定した (52) と (53) を見てみよう。

(52) Hindi estudyante sa TUFs si Kazuki.

NEG student LOC TUFs PNOM Kazuki

「一輝は東京外国語大学の学生ではない (i.e., 別の何かだ)。」

(53) Hindi si Kazuki ang estudyante sa TUFs.

NEG PNOM Kazuki NOM student LOC TUFs

「東京外国語大学の学生なのは一輝ではない (i.e., 別の誰かだ)。」

措定文の発話のポイントは個体に属性を付与することにあるので、否定措定文 (52) は属性付与を否定した表現となり、一輝が学生という属性を持っていないという意味になる。この否定文が含意するのは、一輝が別の大学の学生であるということや、東京外国語大学の先生であるといったことである。ここで否定された東京外国語大学の学生が誰かということは一切問題にならない。

一方で、指定文のポイントは既に知られた属性の持ち主を指定することにあるので、その否定文 (53) はその指定を否定することになる。つまり、東京外国語大学の学生という属性をもっているのが一輝ではないということである。この否定文が含意するのは、東京外国語大学の学生という属性をもっている人間がいて、それが一輝以外の誰かであるということである。一輝がどのような属性をもつかということはここではまったく重要ではない。

2.3. 疑問文とその答え

発話のポイントという措定文と指定文の違いは、両者の疑問文での振る舞いの違いとしても現れる。たとえば、(54) のような疑問文を考えてみよう。

(54) Ano si Kazuki?

what PNOM Kazuki

「一輝はどういう人ですか？」

この疑問文はすでに話題となっている一輝という人物についてその人物がどのような属性をもつかを尋ねている疑問文である。このような属性を尋ねている疑問文の答えとしては、属性を叙述することにポイントがある構文、すなわち措定文を使うしかない。指定文は使うことができない。したがって、(55) のようになる。

(55) Q:Ano si Kazuki? (=54)

A: ^{ok}Estudyante sa TUFs si Kazuki. (= 措定文 (50))

*Si Kazuki ang estudyante sa TUFs. (= 指定文 (51))

一方で、(56) のように、複数の学生のなかで誰が「東京外国語大学の学生」であるかを聞くような疑問文を考えてみよう。

(56) Sino ang estudyante sa TUFs?

who.NOM NOM student LOC TUFs

「東京外国語大学の学生は誰ですか？」

この疑問文はすでに話題となっている属性についてどの個体が指定できるかということを知っている文である。したがって、この疑問文に答えるには同じく個体を指定する構文がちょうどよい。すなわち、(57) のように措定文よりも指定文の方がよい。

(57) Q:Sino ang estudyante sa TUFs? (=56)

A: *Estudyante sa TUFs si Kazuki. (= 措定文 (50))

^{ok}Si Kazuki ang estudyante sa TUFs. (= 指定文 (51))

なお、すでに明らかかもしれないが、措定文を用いて答えるのが適切だった疑問文 (54) はそれ自体がすでに措定文であり、また、指定文を用いて答えるのがふさわしかった疑問文 (56) もそれ自体がすでに指定文である。

2.4. 限定の小辞 *lang* の限定要素

指定文と指定文の発話のポイントの違いは、否定文、疑問文だけでなく、*lang* のような限定の小辞の解釈の違いとなっても現れる。限定の小辞 *lang* は節の一番前の要素の直後に出現するクリティックで、「～だけ」という意味を文に付け加える。この *lang* は指定文では属性を限定し、指定文では個体を限定する。たとえば、指定文 (50) と指定文 (51) につけると、それぞれ (58) と (59) のようになる。

(58) Estudyante lang sa TUFUS si Kazuki.
 student only LOC TUFUS PNOM Kazuki

「一輝は東京外国語大学の学生にすぎない。」

(59) Si Kazuki lang ang estudyante sa TUFUS.
 PNOM Kazuki only NOM student LOC TUFUS

「東京外国語大学の学生なのは一輝だけだ。」

(複数の大学の学生があつまっている状態で)

指定文 (58) において *lang* が限定しているのは「東京外国語大学の学生」という属性である。一輝という個体も持っている属性がその範囲に限定されるということを表現する。一方で、指定文 (59) においては *lang* が限定しているのは属性ではなく、その属性をもつ個体である。つまり、「東京外国語大学の学生」という属性をもつのがこの一輝という個体のみだと指定しているのである。このように指定文と指定文では限定の小辞 *lang* の限定する要素が異なるのである。

2.5. まとめ

第 2 節では指定文と指定文の使い分けを論じた。指定文の発話のポイントが属性を叙述することになり、指定文のそれが個体の指定であることを出発点に、否定文の含意や疑問文の答え方、さらには限定の小辞の限定要素において両者が明確に使い分けられることを論じた。

3. 分類のあいまいさと例外

第 1 節では、タガログ語の非動詞述語文を 3 つに分類し、それぞれについて構造的・意味的特徴について検討した。指定文、指定文、同定文という構文にはそれぞれ独自の意味とそれを反映した構造があるのであった。第 2 節ではこのうち指定文と指定文をとりあげ、その使い分けについて詳しく論じた。

ところが、意味的に考えれば峻別できるものの、これら3つの構文が見た目ではどちらか区別しがたい場合もいくつか存在する。本節ではそのような場合を議論する。3.1節では構造的に指定文にも同定文にも解釈できる例をとりあつかう。3.2節では指定文が措定文と同じような構造を持ってしまう特殊ケースを扱う。最後に、3.3節では本論の分析の例外として、*Ako si Maria* という自己紹介表現を論じる。

3.1. 構造的なあいまいさ：指定文と同定文

指定文の構文パターンを図式化した (21) と同定文のそれを図式化した (42) を比べれば明らかのように、両者は構造的には、どちらも、主格名詞句の並置であり、したがって、原理的には、すべての同定文は指定文と構造的にあいまいである。たとえば、(60) を見てみよう。

- (60) Si Mhawi ang s<in>a~sabi mo=ng pogi=ng estudyante.
 PNOM Mhawi NOM PF:IPFV:say 2SG.GEN=LK handsome=LK student
 指定文「おまえのいうかっこいい学生というのは Mhawi だ」
 同定文「おまえのいうかっこいい学生は Mhwai (と実は同一人物) だ。」

(60) には二つの解釈がある。指定文なら「おまえのいうかっこいい学生」という属性を持っているのが Mhawi であると指定する意味になるし、同定文なら「おまえのいうかっこいい学生」という個体は、我々の知っている Mhawi という個体と同一人物だと主張していることになる。もう少し複雑な例に (61) がある。

- (61) Siya si Paul.
 3SG.NOM PNOM Paul
 指定文「Paul (という名を持っているの) は彼だ。」
 同定文「(既に話題となっている) Paul は彼 (と実は同一人物) だ。」

(61) は指定文と同定文の二つの解釈を持っている。指定文という解釈なら、Paul という名を持っている個人が誰かと言われれば、それは「彼」だと指定する文になる。同定文であるなら、既に話題となっている Paul と、Paul とは別の個人であると信じられていた「彼」が実は同一人物だったのだという意味になる。指定文で *si Paul* は「Paul という名を持っている」という属性を表現しているが、同定文で *si Paul* は具体的な個体を指示している。

このような指定文と同定文の構造的なあいまいさは、(62) のような指定文の特殊ケースとし

ての擬似分裂文でも観察される。

(62) Si Robert ang b<um>alik sa Batangas.

P.NOM Robert NOM AF:go.back LOC Batangas

指定文「バタンガスに帰ったのは Robert だ。」

同定文「(先ほど話題になった)バタンガスに帰った人は Robert (と同一人物)だ。」

このように、二つの主格名詞句の並置という構造的類似性のために、指定文と同定文は常にあいまいである。しかし、このあいまいさは本稿の提示する分類にとってあまり問題にはならない。まず、両者の意味的違いが明らかである。つぎに、同定文の表現する意味が特殊であるため、同定文が実際の自然談話で発話されることは頻度としてかなり少ない (Nagaya 2011 で示した *ang/yung* の用法別頻度も参照のこと)。

3.2. 指定文の補語が不定な指示対象をもつ場合のあいまいさ

第 1.3 節の (21) で論じたように、指定文の構造は「補語 = 主格名詞句 + 主語 = 主格名詞句」であり主語も補語も主格名詞句で実現するのが基本である。そして、この基本は、補語に現れる個体が定 (*definite*) の解釈を持つ場合は必ず守られる。しかし、補語が不定 (*indefinite*) の解釈を持つ場合、主格名詞句のはずの補語に裸名詞句が現れることもある。結果として、そのような指定文は措定文と構文上見分けがつかなくなるのである。(63) を観察してみよう。

(63) Lalaki ang pinaka-matangkad na tao sa mundo.

man NOM most-tall LK person LOC world

措定文「世界でもっとも背の高い人間は男性です。」

指定文「世界でもっとも背の高い人は(ある)男の人です」

(63) には二つの解釈がある。一つは、措定文の解釈で、主語の主格名詞句の指示対象である「世界で最も背の高い人間」が補語で表現された属性、すなわち「男性である」を持っているという解釈である。もう一つは指定文の解釈で、「世界で最も背の高い人」という属性をもった人として、不定な指示対象「(ある)男の人」を指定してやる場合である。この意味的な差は英語にしまえばどちらも *The one who is the tallest person in the world is a man* になってしまうが、(63) をよく吟味すると微妙な意味の違いが存在することがわかる。なお、補語が主格名詞句ではないために、このタイプの文が同定文の解釈を持つことはない。また、(63) が指

定文であることを明示したければ、*lalaki* が定であると考えて、補語に *ang* をつければよい。

同様のことは (64) のように補語が疑問詞であっても起こる。

(64) *Ano iyon?*

what DEM.DIS.NOM

措定文「それ(眼前指示、個体)は何(属性)ですか？」

指定文「それ(文脈指示、属性)は何(個体)ですか？」

(64) にも二つの解釈があり、措定文としては目の前にある「それ」で指された個体がどういう属性をもつか尋ねている文である。一方で、指定文としては指示代名詞 *iyon* で文脈指示された何らかの属性、たとえば、「クイズの答え」という属性の持ち主が何であるか指定するための疑問文である。なお、指定文であることを明示したければ、補語に *ano* ではなく、*ang alin* 「どれ」など主格形をともなった形を使えばよい。

最後に、このあいまいさは、指定文の特殊ケースである擬似分裂文でも観察できることを付け加えておこう。たとえば、タガログ語で名詞と動詞の区別がないことを示す例としてよく引用される次の例を考えてみよう (Sasse 1993:655 によるが、グロスおよび自由翻訳は著者のもの)。(65) は動詞述語文であり、(66) はそれから作られた非動詞述語文である。

(65) *Nag-ta~trabaho ang lalaki.*

AF:IPFV:work NOM man

「(その)男は働いている。」

(66) *Lalaki ang nag-ta~trabaho.*

man NOM AF:IPFV:work

措定文「働いている人は男性です。」

指定文「働いているのは(ある)男の人です。」

(65) は単なる動詞述語文であり、主語で指示された個体が「働く」という行為を現在行っているということを表している。一方で、(66) には二つの解釈がある。一つは措定文解釈で、「働いている」という行為で特徴付けられる個体が、「男性」という属性を持っているというものだ。もう一つは、不定の個体を指定するタイプの指定文(あるいは擬似分裂文)という解釈だ。「働いている」という行為を行っているのが、「女の人」ではなく「(ある)男の人」(不定な指示対象)であると指定する解釈である。どちらの解釈が適切かは文脈による。

(66) の二つの異なる解釈は言語類型論的に重要な区別である。措定文として解釈した場合、(65) で項だった *lalaki* が (66) では述語として現れており、(65) で述語だった *nagtatrabaho* が (66) では項として使われているということになる。こうすると、なるほど「項となるのは名詞、述語となるのが動詞」という語類の分類はタガログ語では成立しないように見えてくる。一方で、(66) を指定文として解釈するなら (65) でも (66) でも、*lalaki* は個体を指示し、*nagtatrabaho* は行為あるいは属性を叙述しているので、それぞれ項と述語、あるいは名詞と動詞と言ってもよさそうである。このように、(66) の二つの解釈はタガログ語の品詞分類に関する二つの立場と対応しているのである。そして、どちらの読みを証拠として採用するかで、タガログ語の品詞分類の議論が大きく違ってくるのである。なお、Sasse (1993:655) では “The one who is working is a man” という訳があてられているのみで、この二つの異なる解釈には言及されていない。

3.3. 例外としての自己紹介表現 *Ako si Maria*

最後に、これまでの議論の例外として、自己紹介のときに使われる *Ako si Maria* 「私は Maria です」タイプの構文をとりあげたい。この構文は補語が一人称代名詞の主格形であり、主語が個人名の主格名詞である。この構文は典型的には自己紹介するとき用いられ、したがって、どのような市販のタガログ語 (フィリピン語) の入門書においても一番に取り扱われているタイプの文である。たとえば、アメリカの大学生向けのタガログ語の教科書 Barrios (2011) は第一課のダイアローグを次のフレーズから始めている。

(67) *Ako si Maria.*

1SG.NOM PNOM Maria

「私は Maria です。」

タガログ語を勉強する誰もが知っているこのタイプの文のどこが問題かといえば、解釈と語順の点で、本論文で扱ってきた非動詞述語文の議論の大きな例外になることである。まず、解釈である。(67) は補語も主格名詞であり、主語も主格名詞であるから、解釈としては指定文と同定文の可能性しかない。しかし、この解釈ではうまくいかない。指定文だとすると、(67) は「(すでに話題となっている) Maria という個人名をもつのが私です」という意味になり、その意味ではこの文は文法的であるものの、自己紹介のときに使う表現としてはおかしい。今日の前にいる「私」がどういう名前かを述べるのが自己紹介だからである。また、同定文の解釈もできない。同定文なら「(すでに話題となっている) Maria と (すでに目の前にいる) 私が同

一人物です」という意味となるが、このような解釈は自己紹介の場面にはふさわしくない。つまり、この文は構造としては指定文か同定文の解釈しかもたないはずだが、どちらの解釈でも自己紹介の文脈でこの文が使われることを説明できない。

さらに、このタイプの文は語順がおかしい。(67)では「私」が補語で、「Maria」が主語として出てきている。しかし、これまでの議論が正しいとすると、「私が Maria という名をもつ」という内容を非動詞述語文で言おうとするなら、(67)のように「個人」「個人の名前」の順で言うのではなく、(68)のように、「個人の名前」「個人」の順で言うほうが理にかなっているはずである。第1節で議論したように、タガログ語の非動詞述語文では文の先頭にくるものに発話のポイントがくることが観察され、自己紹介の文脈では個人名に発話のポイントがあるはずだからである。

(68) Si Maria ako.
PNOM Maria 1SG.NOM
「私は Maria です。」

(68)がタガログ語として自然であるはずだということは、同じく自己紹介で使われる措定文(34)と比べてみれば明らかである。措定文(34)では *Pedro ang pangalan ko* 「私の名前は Pedro です」というふうに Pedro という発話のポイントが文の先頭に来ている。しかしながら、実際のタガログ語母語話者の直観では、自己紹介の文脈では、(67)のようにいうのが自然であり、(68)がよいという人は少ない。また、フィリピン大学ディリマン校の講義でこの例文を取り上げたところ、(68)を非文であると判断した学生もいたくらいである。

まとめると、自己紹介の文脈で使われる *Ako si Maria* タイプの非動詞述語文は、解釈の点でも語順の点でも例外である。この論文で築いてきた非動詞述語文の理論ではうまく説明できない。このタイプの表現は自己紹介専用の固定表現だからそう言うしかないと言ってしまえば簡単だが、この論文では例外として今後の研究の課題としたい。

なお余談になるが、このタイプの文の取り扱いに困っているのは言語学者だけではない。Ricardo Nolasco (私信)によればフィリピン語教師、つまり、中等教育機関で国語としてタガログ語を教えている教師たちも困っている。彼ら・彼女らのなかには、理屈にあわない(67)よりも(68)のような文が「正しいフィリピン語」であると考え、そう教えている人もいるそうである。言語学者としてはこのような規範文法には与しないが、この構文が例外であることを示す挿話として記しておく。

3.4. まとめ

本節では、第 1 節、第 2 節で議論してきた措定文、指定文、および同定文という分類についてあいまいになるような場合や例外となるような場合を論じた。3.1 節では指定文と同定文であいまいになる場合を、3.2 節では措定文と指定文であいまいになる場合を論じた。いずれもあいまいになるだけで、文脈さえはっきりすれば解決できる問題である。より深刻なのは 3.3 節であつかった自己紹介表現 *Ako si Maria* である。この表現は解釈の点でも語順の点でも本論文の例外となっている。

おわりに

本論文ではタガログ語の非動詞述語文を、特に、措定文と指定文に注目しながら記述し分析した。まず、この言語の非動詞述語文を措定文、指定文、さらには同定文に分けたうえで、それぞれの構造と機能について記述した。そのうえで、措定文と指定文の使い分けについて、発話のポイントとそこから導かれる意味的違いを論じた。最後に、今回提示した分類においてあいまいになってしまうケースや例外となるケースを詳細に検討した。

略号一覧

本論文で使用した略号は以下の通りである：AF-actor focus, DEM-demonstrative, DIS-distal, EXC-exclusive, GEN-genitive, IPFV-imperfective, LK-linker, LOC-locative, NEG-negation, NOM-nominative, P-personal name, PF-patient focus, PFV-perfective, PL-plural, PROS-prospective, PROX-proximal, SG-singular, 1-first person, 2-second person, 3-third person, <>-infix, " = " -cliticized.

謝辞

本論文は、フィリピン大学ディリマン校での講義 “Tagalog copular constructions: How to understand referentiality and information structure in Tagalog” (2013 年 1 月 22 日・24 日)、ならびに東京外国語大学における授業「フィリピン言語学入門」(2013 年度春学期) をもとに執筆されたものである。措定文と指定文の区別に関する内容の一部は Nagaya (2011) での議論にもとづくが、上記の講義でのコメント・フィードバックやその後の研究の進展の成果も反映している。フィリピン大学ディリマン校の Ricardo Ma. Duran Nolasco 先生は、同大学での講義をホストして下さっただけでなく、この研究についてさまざまなアドバイスをくださった。感謝申し上げます。東京外国語大学での授業に参加してくれた諸君にも感謝したい。また、大阪大学大学院言語文化研究科修士課程山本恭裕くんならびに東京外国語大学言語文化学部佐藤一

輝くんにもお礼の言葉を述べたい。山本くんにはフィリピン言語学の立場から、佐藤くんにはフィリピン語学習者の立場から率直な意見をもらった。最後に、タガログ語話者として本論文を助けてくださった Farah Cunanan さん、John Carlo Katigbak くんにも感謝している。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。なお、本論文は科学研究費補助金 #25884018 (代表：長屋尚典) および #25244017 (代表：峰岸真琴) からの支援を受けている。

参考文献

- Barrios, Joi. 2011. *Tagalog for Beginners: An Introduction to Filipino, the National Language of the Philippines*. North Clarendon, VT: Tuttle Publishing.
- Curnow, Timothy Jowan. 2000. Towards a cross-linguistic typology of copula constructions. In: John Henderson (ed.), *Proceedings of the 1999 Conference of the Australian Linguistic Society* (<http://www.linguistics.uwa.edu.au/research/als99/proceedings>) .
- Dixon, R.M.W. 2002. Copula clauses in Australian languages: A typological perspective. *Anthropological Linguistics* 44: 1–36.
- Gundel, Jeanette K. 1988. Universals of topic-comment structure. In: Michael Hammond, Edith Moravcsik, and Jessica Wirth (eds.), *Studies in Syntactic Typology*, 209–239. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Moro, Andrea. 1997. *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nagaya, Naonori. 2007. Information structure and constituent order in Tagalog. *Language and Linguistics* 8: 343–372.
- Nagaya, Naonori. 2011. Rise and fall of referentiality: articles in Philippine languages. In: Foong Ha Yap, Karen Grunow-Härsta, and Janick Wrona (eds.), *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives*, 589–626. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- Sasse, Hans-Jürgen. 1993. Syntactic categories and subcategories. In: Joachim Jacobs, Arnim von Stechow, Wolfgang Sternefeld, and Theo Vennemann (eds.), *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research*, 646–687. Berlin: de Gruyter.
- Schachter, Paul. 1985. Parts of speech systems. In: Shopen, Timothy (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, Volume 1: *Clause Structure*, 3–61. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schachter, Paul, and Fe T. Otanes. 1972. *Tagalog Reference Grammar*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Van Valin, Robert D., Jr. 2008. RPs and the nature of lexical and syntactic categories in Role and Reference Grammar. In: Robert D. Van Valin, Jr. (ed.), *Investigations of the Syntax-semantics-pragmatics Interface*, 161–178. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Predicational and specificational constructions in Tagalog

NAGAYA Naonori

In this paper I present a description and analysis of nonverbal-predicate constructions in Tagalog, with special reference to predicational and specificational constructions. The major findings of this paper can be summarized as follows. First, nonverbal-predicate constructions in this language can be classified into three types: predicational, specificational, and identificational constructions. Second, although they look similar in terms of surface structure and truth-conditional meanings, predicational and specificational constructions are different in several ways. The most important distinction pertains to the point of utterance. Namely, the point of utterance in predicational constructions lies in attributing a previously unknown property to an individual, whereas that in specificational constructions is in specifying who it is that has the property speaker and hearer already knew. Lastly, there are three cases where my typology of nonverbal-predicate constructions appears to fail: structural ambiguity between specificational and identificational constructions, specificational constructions with an indefinite complement NP, and self-introducing expressions of the *Ako si Maria* type.

